

堤精二先生略年譜及び著述目録

鈴木 亮

「柳井に呼ばれて来たんだよ」——昨年（平成三十一年）、桜井宏徳氏の編にかゝる『柳井滋の源氏学 平安文学の思想』が武蔵野書院より刊行せられた折、ふとこの言葉が思ひ出された。堤精二先生のお言葉である。堤先生は、平成二年四月より同十五年三月まで本学文学部日本文学科の非常勤講師として「日本文学特殊講義」(のち「近世日本文学講義」)を担当されてをり、其の最終講義の後、成蹊にいらしたきつかけをかう語つて下さつた。

堤先生、柳井先生のお歳は知つてはゐたもの、当時柳井先生を呼び捨てに出来る人がゐるのか、と驚きをもつて伺つたのを覚えてゐる。堤先生は昭和二年、柳井先生は昭和五年のお生れゆゑ当然のことであるのだが、遠藤宏先生も鈴木日出男先生も「柳井先生」「柳井さん」と呼んでいらつしやつたので、いさゝか奇妙な感じがした。堤先生は昭和二十七年三月、翌年三月には柳井先生が東京大学を卒業されてをり、学生時代からの五十年以上にも亘るお付き合いだったのであらう。また、堤先生は東京大学卒業後文学部の助手をとめてをり、二年後柳井先生も其の任にあたられてゐる。

平成十三年、学部四年の私は、堤先生の「近世日本文学講義」をはじめ受講し、其処で先生は江戸文学との出逢ひは「上野の山にある中学校」に通つてゐる時にあつた、と仰つた。この中学校、第二東京市立中学校（現、東京都立上野高等学校）と云ひ、我が母校でもある。不思議な縁もあるものだと、授業が終るや先生にその事を申し上げた。近世文学の大家堤先生が、忽ちなつかしい先生となつた。西鶴に関する御講義はもちろん、馬琴の話も面白かつたのであるが、それにも増して私の興味をそゝつたのは、授業が終つた後に伺ふ先生の昔話であつた。高藤太一郎、福原富三郎、壬生勤、北杜夫、辻邦生、斎藤茂吉、望月市恵、古川久、蛭川幸茂、森銃三を通して知るより外ない方々が、眼前に現れるのである。或る時『どくとるマンボウ青春記』に出て来る「国文学者T」とは先生のことですよね、とお尋ねしたところ、「莫迦だなあ、あれは国文学者Tなんだ」と笑ひながら、松高時代の資料を北杜夫氏に提供したことなど話して下さつた。中学校の同窓会には殆ど行つた事がない

と仰有つてゐた先生だが、「あなたに会つてなつかしく思ひ、今回行つてみることにした」と、平成十四年六月上野中学の同期会に参加した事も楽しさうにお話し下さつた。同窓会誌にその時の記事があるので引用したい。

堤精二は何十年ぶりかの出席とあつて誰何の判別に戸惑つたが「苦勞の航海を終えた舟が舟だまりに休んでいるように見えた」との感想。

堤先生には、卒業論文迄読んで頂き、その後も抜刷が出来上がる度にお送りし、ご指導賜つてゐた。院生時代、夏休みになつたら信濃木崎夏期大学（先生は理事長でいらした）に遊びにお出でとの誘ひも頂いてゐたのであるが、結局果せずじまつた。

此処に、先生を偲ぶ縁として、略年譜、著述目録を編む。論文の数こそ多くはないものの、「古典研究者や古書肆にとつて絶対必備の書」である『国書総目録』、そして『国書人名辞典』を編纂なさつたといふことは、まさに偉業と云ひ得よう。

『国書総目録』の裏に、量り知れないほどの人々の歴史が秘められているということに、いまさらのごとく感動を覚えるのである。（堤精二「知らなかつた人達との出会い」『図書』五百三十六号、平成六年二月）

私もこのやうな感懐を抱くこと頻りである。

堤精二先生略年譜

昭和2年2月27日 東京市小石川区小日向台町（現、東京都文京区

小日向）に堤常（岩波書店支配人）、久子（同書店副支配人）の

次男として生れる。父常は哲学者安倍能成の従弟にあたる。

昭和15年3月 東京市小日向台町尋常小学校卒業。

昭和15年4月 第二東京市立中学校入学。

昭和20年3月 東京都立上野中学校卒業（昭和18年7月、都制施行

により名称変更）。

昭和20年4月 松本高等学校文科乙類入学。

昭和23年3月 同校卒業。

昭和24年4月 東京大学文学部国語国文学科入学。

昭和27年3月 同大学卒業。卒業論文「井原西鶴論」。

昭和27年4月 同大学文学部助手。

昭和31年4月 お茶の水女子大学教育学部講師。

昭和36年1月 同大学教育学部助教。

昭和44年6月 同大学教育学部教授。

昭和51年10月 同大学文教育学部長（昭和53年9月まで）。

昭和58年4月 同大学附属図書館長（昭和62年3月まで）。

昭和58年4月 同大学女性文化資料館長（昭和61年4月、改組により女性文化研究センター長。平成2年3月まで）。

平成4年3月 同大学停年退官。

平成4年4月 放送大学教授。お茶の水女子大学名誉教授。
平成5年4月 放送大学附属図書館長（平成9年3月まで）。
平成9年3月 同大学定年退職。
平成9年4月 財団法人信濃通俗大学会理事長（平成19年3月まで）。

平成18年4月 瑞宝中綬章受章。
平成29年11月7日 逝去。享年九十。墓所は、れんげ山霊園（東京都文京区小日向）。なほ、耀子夫人、長男玄太氏（帝京大学講師）も既に他界せられてゐる。

堤精二先生著述目録

一 編著書

『西鶴集』上（日本古典文学大系47）

※共著、麻生磯次・板坂元↓平成3・12新装版

岩波書店 昭和32・11

『国書総目録』第一卷〜第八卷、著者別索引

岩波書店 昭和38・11〜51・12

※共編、森末義彰・市古貞次↓平成元・9〜3・1補訂版

『講座日本文学西鶴』上下

至文堂 昭和53・1

※共編、松田修

『日本永代蔵』（校注古典叢書）

明治書院 昭和53・3

※↓平成15・2新装版

『日本文学全史近世』

学燈社 昭和53・9

※責任編集、市古貞次↓平成2・3増訂版

『日本古典文学大辞典』第一卷〜第六卷

岩波書店 昭和58・10〜60・2

※監修、市古貞次・野間光辰。共編、秋山虔・大久保正・大谷篤蔵・久保田淳・佐竹昭広・信多純一・中村幸彦↓昭和61・12簡約版（二冊）

『高等学校新選日本文学史』

尚学図書 昭和59・1

※共著、久保田淳・三好行雄↓平成6・1 『新選日本文学史』

『日本文化総合年表』

岩波書店 平成2・3

※共編、市古貞次・浅井清・久保田淳・篠原昭二・堀内秀晃・益田宗・三好行雄

『近世日本文学』

放送大学教育振興会 平成4・3

※共著、清登典子

『国書人名辞典』第一卷～第五卷

岩波書店 平成5・11～11・6

※監修、市古貞次。共編、大曾根章介・堀内秀晃・益田宗・篠原昭二・久保田淳・揖斐高・市古夏生

『国文学入門』

放送大学教育振興会 平成8・3

※共著、島内裕子

二 複製・解題

『絵入好色二代男』（複製日本古典文学館）

日本古典文学刊行会 昭和46・10

『国性爺合戦』（複製日本古典文学館）

日本古典文学刊行会 昭和47・10

『浮世草子』I II（岩崎文庫貴重本叢刊）

貴重本刊行会 昭和49・7

『大東急記念文庫本好色五人女』（複製日本古典文学館）

ほるぷ出版 昭和51・4

『なぐさみ草』上下（日本古典文学影印叢刊）

貴重本刊行会 昭和59・8～11

※共著、小高道子

三 論文等（単著）

西鶴を研究した人々

『解釈と鑑賞』一八一―一 昭和28・1

西鶴のユーモア

『解釈と鑑賞』一九一―五 昭和29・5

『好色二代男』と『諸艶大鑑』―その成立をめぐる試論―

『国語と国文学』三一―七 昭和29・7

※↓日本文学研究資料刊行会編『西鶴』（有精堂出版 昭和44・10）に再録

国文研究室だより

国文研究室だより

西鶴研究の手引

西鶴を研究する人のために

明治期西鶴研究史の一資料

〔西鶴〕参考文献・年譜

秋成にはどんなテーマがあるか

北条団水

近世文学

西鶴の文章における語彙と用字法の特徴

西鶴置土産

近世小説の教訓性

白身坊

『近年諸国咄』の成立過程

※↓檜谷昭彦編『日本文学研究大成 西鶴』（国書刊行会 平成元・5）に再録

井原西鶴

西鶴とその作品

注釈

近世文学研究発生の基盤

西鶴とその作品

日本文学史（十四）近世文学史Ⅰ

『東京大学国語国文学会会報』六 昭和29・10

『東京大学国語国文学会会報』七 昭和30・10

『日本文学』五―二 昭和31・2

『国文学』二―六 昭和32・5

『解釈と鑑賞』二二―六 昭和32・6

暉峻康隆編『日本古典鑑賞講座17西鶴』角川書店 昭和32・7

『解釈と鑑賞』二三―六 昭和33・6

『俳句講座2俳人研究』明治書院 昭和33・11

市古貞次『日本文学史概説』秀英出版 昭和34・4

『講座解釈と文法6』明治書院 昭和34・12

『解釈と鑑賞』二五―一 昭和35・10

『解釈と鑑賞』二六―一 昭和36・1

『文学・語学』二九 昭和38・1

『近世小説 研究と資料』至文堂 昭和38・10

『解釈と鑑賞』二九―六 昭和39・6

『国文学』九―八 昭和39・6

『国文学』一〇―八 昭和40・6

『国語と国文学』四二―一〇 昭和40・10

市古貞次編『古典文学研究必携』学燈社 昭和42・2

『日本史の研究』五六 昭和42・2

日本文学史 (十五) 近世文学史 II

日本文学史 (十五) 近世文学史 III

日本文学史 (十七) 近世文学史 IV

日本文学史 (十八) 近世文学史 V

近世文学の研究の展望

『国書解題』から『国書総目録』へ

都鄙の交錯―西鶴―

西鶴における人間の発見

元禄の所産

江戸板『好色一代男』覚え書

北杜夫のこと

書物の戸籍簿―国初より慶応まで日本人の手になる本―

寛文元年 (1661) 寛文10年 (1670)

寛文11年 (1671) 延宝8年 (1680)

天和元年 (1681) 元禄3年 (1690)

近代小説の方法・西鶴考

西鶴

追憶 (麻生磯次博士追悼)

西鶴の魅力―都市の文学として―

好色五人女の〈おせん〉揺れ動く女心

好色一代女の〈二代女〉浮世の果は皆小町なり

近世文学の一大宝庫

『東京大学総合図書館所蔵霞亭文庫 (マイクロフィルム版)』内容見本 雄松堂フィルム出版 (昭和58)⁴

『日本史の研究』五七 昭和42・4

『日本史の研究』五八 昭和42・7

『日本史の研究』五九 昭和42・11

『日本史の研究』六〇 昭和43・1

『国史の研究』六〇 昭和43・1

あとがき 「お茶の水女子大学百年史」 刊行委員会編 『お茶の水女子大学百年史』 「お茶の水女子大学百年史」 刊行委員会 昭和59・5

あとがき 「お茶の水女子大学女性文化資料館報」 五 昭和59・7

次田先生を偲んで 澤田歌子ほか編 『見つ、偲ばむ 次田真幸先生の追悼文集』 次田万貴子 昭和59・11

あとがき 「お茶の水女子大学女性文化資料館報」 六 昭和60・7

女性文化資料館の十年 「お茶の水女子大学女性文化資料館報」 七 昭和61・9

あとがき 「お茶の水女子大学女性文化研究センター年報」 一 昭和62・12

あとがき 「国文」 六九 昭和63・7

あとがき 「お茶の水女子大学女性文化研究センター年報」 二 昭和63・12

編集後記 「お茶の水女子大学女性文化研究センター年報」 三 平成2・3

近世文学に描かれた人間像―井原西鶴の作品から― 森隆夫・高野尚好編 『豊かな心・たくましく生きる人間』 (教育課程と学校運営の改善4) ぎょうせい 平成元・3

あとがき 市古貞次編 『新・古典文学研究必携』 (別冊国文学40) 学燈社 平成2・11

西鶴 安曇野の先生―紫雲英田のように暖かく広い心― (追悼望月市恵先生) 『いま信州教育を問う』 二 平成4・1

『言葉遊び』 について 『放送大学通信 On air』 二六 平成4・6

『三代目』―附属図書館長就任にあたって― 『放送大学通信 On air』 二八 平成4・12

『馬琴日記』 から 『放送大学通信 On air』 三〇 平成5・6

知らなかつた人達との出会い 『南総里見八犬伝稿本1』 (早稲田大学蔵資料影印叢書国書篇42) 月報 早稲田大学出版部 平成5・9

西鶴の妻 『図書』 五三六 平成6・2

五味〔智英〕先生を偲びて 『放送大学通信 On air』 四〇 平成7・12

北安曇教育会編 『湖光山色』 信濃木崎夏期大学講師揮毫帳』 北安曇教育会 平成8・3

鈴木 亮 堤精二先生略年譜及び著述目録

老後余福

松本高等学校寮歌「春寂寥」

追懷（市古貞次博士追悼）

〔開講八十周年記念式典〕 祝辞

白木（博次）先生

第八一回閉講式挨拶

〔色紙三葉〕

第83回閉講式挨拶（DVD「懐かしい先生方の声」）

第87回閉講式挨拶（DVD「懐かしい先生方の声」）

第89回閉講式挨拶

『信濃木崎夏期大学百年誌』 編纂委員会編

北安曇教育会

同右

同右

同右

『堤精二理事長先生の思い出を語る会』（リーフレット）

信濃木崎夏期大学

平成30・8

四 論文等（共著）

西鶴を正しく理解するために

※共著、前田金五郎・板坂元・中沢千鶴子・富士昭雄

『解釈と鑑賞』二二一六

昭和32・6

『正章千句』研究（一）

※共著、亀井孝・中村俊定・前田金五郎・宮本三郎

『文学』三八一—

昭和45・1

五 座談会

編纂二十五年—「国書総目録」第一巻が出来た折に—

※森末義彰・市古貞次

『図書』一七一

昭和38・11

青春と文学

※辻邦生・北杜夫

『あるとき』五

昭和53・9

青春と文学(続)

※辻邦生・北杜夫

追悼五味智英先生を偲ぶ

信濃木崎夏期大学事務所編『開講八十周年沿革概要』

信濃木崎夏期大学事務所

平成8・3

※池上隆祐・白木博次・山下宏明・村松淳・山本廣(司会)

これからの大学のあり方

『北安曇教育』四二 平成9・2

※白木博次・佐藤保・原田憲一・田中高光・牛越充・荒井和比古・宮沢文人・井口博文・丸山一由・犬飼康雄(司会)

学問の思い出し―市古貞次博士を囲んで―

『東方学』一〇四 平成14・7

※市古貞次・秋山虔・久保田淳・三角洋一・福田秀一(司会)

六 項目執筆

笑の研究(麻生磯次著) 近世列伝体小説史上・下(水谷不倒撰、坪内逍遙閱) 新撰列伝体小説史前編(水谷不倒著) 近代小説史(藤岡

作太郎著) 近世日本小説史二冊(鈴木敏也著) 江戸小説研究(尾崎久彌著) 西鶴裸俎(瀧田貞治著) 西鶴の書誌学的研究(瀧田貞治著)

世間胸算用詳解(植村邦正著) 三田浄久(平林治徳著)

麻生磯次編『国文学研究書目解題』至文堂 昭和32・6

古文学踏査(高野辰之著) 書誌学序説(山岸徳平著) 日本書誌学(註)の研究(川瀬一馬著) 日本文学大辞典(藤村作編) 日本文学年表(市

古貞次編) 国書解題二冊(佐村八郎著) 群書解題二十二卷三十冊 女流著作解題(女子学習院編) 日本随筆索引増訂版正・続(太田為

三郎編) 戯曲小説近世作家大観第一卷(鈴木行蔵編) 江戸文学研究(藤井乙男著) 上方文学と江戸文学(藤村作著) 徳川時代の芸術と

社会(阿部次郎著) 嵯峨本考(和田維四郎著) 慶長以来書買集覧(井上和雄著) 近世物之本江戸作者部類(木村三四吾編) 俳諧評釈(柳

田国男著) 校註風俗文選通釈(藤井紫影編) 国文学史上の人々(丸山季夫著) 菅江真澄の旅と日記(内田武志著)

市古貞次編『国文学研究書目解題』東京大学出版会 昭和57・2

七 執筆協力

- 久松潜一・麻生磯次・守随憲治・池田亀鑑・吉田精一・市古貞次監修 『原典による日本文学史』⁶⁾
 久松潜一・麻生磯次・山岸徳平監修、吉田精一・市古貞次・三谷栄一編 『日本文学作品人名辞典』⁷⁾
 新村出編 『広辞苑 第三版』
 新村出編 『広辞苑 第四版』
 河出書房 昭和27・9
 河出書房 昭和31・2
 岩波書店 昭和58・12
 岩波書店 平成3・11

八 紹介記事

- 尾形仍 「市古貞次責任編集 堤精二編『日本文学全史4〈近世〉』―書評―」 『国文学』二三一―四 昭和53・11
 岸哲・畑亮夫(写真) 「堤精二先生の書齋」 『住宅建築』七〇 昭和56・1
 北杜夫 「新潮文庫版あとがき」 『マンボウ人間博物館』新潮社 平成元・12
 「堤精二先生略歴および著作一覧」 『国文』七七 平成4・8
 佐藤保 「腰タオルの堤精二先生」 『信濃木崎夏期大学百年誌』編纂委員会編 『信濃木崎夏期大学百年誌』 北安曇教育会 平成28・8
 「堤精二理事長先生の思い出を語る会」(リーフレット) 信濃木崎夏期大学 平成30・8

【註】

- (1) 『成蹊大学文学部史続編(一九七六―一九九〇)資料集』(平成二年、成蹊大学文学部)
 (2) 平成十四年十二月十九日「近世日本文学講義I」。
 (3) 山下甫「旧十七期同期会」(『東叡』三十三号、平成十四年九月、東京都立上野高等学校同窓会東叡会)
 (4) 中野三敏「『国書總目録』の使い勝手」(『彷彿月刊』十六卷七号、平成十二年六月)、「和本の海へ」平成二十一年、角川学芸出版)
 (5) 原本未確認。長坂成行編『内容見本に見る昭和・平成の国文学関係書』(平成三十一年、私家版)に拠る。
 (6) 執筆者名の記載なし。堤精二「追懐」(『国語と国文学』

八十一卷十二号、平成十六年十二月）に拠る。

(7) 同右

〔参考文献等〕

- 安倍能成「岩波と私」(『日本人として』昭和二十三年、白日書院)
「学界消息 東京大学国文学科卒業生卒論題目(昭和二十七年三月)」
『国語と国文学』二十九卷七号、昭和二十七年七月)
藤森善貢「堤常さん」(『本をつくる者の心 造本四十年』昭和六十一年、日本エディタースタール出版部)
熊田淳美「『国書総目録』の文化史的背景」(『三大編纂物群書類従・古事類苑・国書総目録の出版文化史』平成二十一年、勉誠出版)
「国文学研究資料館国文学論文データベース」(<http://base.lnjl.ac.jp/~rombun/>)
「国立国会図書館サーチ」(<https://iss.ndl.go.jp/>)
「Cinii Books 大学図書館の本をさがす」(<https://cinii.ac.jp/books/>)

〔附記〕

本稿をなすにあたり、北安曇教育会三ツ井仁氏には格別なるご高配を頂いた。記して感謝申し上げる次第である。

(すずき・りょう) 東京都立江北高等学校教諭